



## 夢は叶う

神戸大学 経済経営研究所  
教授 上東 貴志

そうだ、「ジェニーはご機嫌ななめ」を検索してみよう。

2010年代前半、YouTubeには昭和のテレビの動画が数多く上がっていた。その頃、私はテレビ代わりに昔の動画を検索しては見ていた時期があった。そんなある日のお気楽な検索が、私に意識改革をもたらすことになる。

### 1980年と「ジェニーはご機嫌ななめ」

「ジェニーはご機嫌ななめ」(以下、ジェニー)は、1980年にジュシー・フルーツというバンドがリリースしたヒット曲だ。1980年は、山口百恵が引退し、松田聖子がデビュー、長嶋茂雄が巨人監督の座を追われ、王貞治が現役を引退した。まさに時代の転換点といえる年だった。

激動の時代に歩調を合わせるかのように、当時の日本の歌謡曲は、歌も演奏もドラマチックなものが多かった。石川さゆりの「津軽海峡・冬景色」はその代表格だが、情感を込めた歌唱と感情の起伏を煽るような演奏は、演歌に限らず、多くの歌謡曲に共通していた。

そんなドラマチックが溢れていた1980年のある日、ジェニーがラジオから流れてきた。ベースにシンセサイザーを重ねた、機械的で容赦のないフレーズが耳につき、「一体何が始まったんだ」と耳を傾けた。そこに続く裏声で囁くような女性ボーカルが、淡々と、最後まで熱唱しない。私が求めていた歌に出会った瞬間だった。

1980年は、イエロー・マジック・オーケストラ(YMO)が快進撃を続けた年でもある。それにより、機械的なテクノ音楽は社会に浸透していた。ジェニーは後に「テクノ歌謡」と呼ばれ、テクノの要素を取り入れた歌謡曲として位置づけられているようだ。楽曲としては、テクノと歌謡曲を行きつ戻りつしながらも、クライマックスのギターソロとエンディングではしっかりと歌謡曲に着地する展開で、今聴いても傑作である。

ただ、当時の私は思った。歌謡曲的な要素を排除して、テクノに振り切ってくれたらいいの

に、と。しかし、人間味あふれる昭和の空気感の中では、いわば「機械的な歌」に舵を切るのには時期尚早だったのだろう。ジュシー・フルーツも、その後はジェニーのあの独特なボーカルは影を潜め、私から見れば、歌謡曲の世界に戻ってしまった。

私の中で二つの「ないものねだり」が、一つの「夢」になる。一つは、テクノに振り切った女性ボーカル。もう一つは、人気絶頂中の 1978 年に解散したキャンディーズ。彼女たちのように歌って踊れる 3 人組で、音楽は全部テクノ、ボーカルは感情を込めずに淡々と歌うグループ。もしも私がアイドルグループを作るなら、そんなグループにしたいと想像を巡らせていた。

## 1980 年代～2000 年代

ジェニー以降の 1980 年代前半は、YMO のメンバーを中心に多数のテクノ歌謡のヒット曲が生まれた。それらの多くは、楽器はテクノでも、歌は歌謡曲色が強く、大衆受けするバランスが感じられた。その後、テクノの楽器は歌謡曲に溶け込み、シンセサイザーや電子ドラムは 80 年代を象徴するサウンドになる。

残念ながら私が直接知っているのはここまでで、1990 年代をアメリカで過ごした私は、この期間の日本のことは何も体験していない。特に音楽については、私の知識から日本の 90 年代はすっぱり抜けていて、2000 年の帰国後もアップデートされないまま、かなりの部分が昭和で止まっていた。

こんな感じで私は 2000 年代を過ごし、そのまま 2010 年代に突入する。

## お気楽な YouTube 検索

そして 2010 年代前半のある日、お気に入りだったジェニーをふと思い出し、YouTube で検索してみようと思ったのだ。あれだけヒットしたのだから、きっと動画が上がっているだろう、と。正確な時期は定かではないが、こんなお気楽な検索をしたのは、私が 2014 年に本学経済経営研究所長に就任するよりも前のことだ。

検索の結果、期待に反して、上位に現れたのはジュシー・フルーツではなかった。地下アイドルのような少女 3 人組がジェニーを歌って踊っているではないか。そのグループの公式チャンネルの動画を見ると、洗練されたテクノポップに機械的なボーカル、ダンスもファッションもお洒落で、完成されたアイドルが躍動していた。私が 1980 年に思い描いていた 3 人組テクノアイドルが、そこにあった。

自分で思い描いた未来を目の当たりにしたのは驚きだったが、それ以上に、私は妙に納得していた。

そうか、夢はこうやって叶うのか。

この3人組は、言わずと知れたテクノポップ・アイドルユニット「Perfume」である。彼女たちは既にブレイクして有名だったが、私は特に視野が狭くなっていた時期で、名前を認識していたかすら怪しい。Perfumeは今でも絶大な人気を誇るが、今年から「コールドスリープ」と称する活動休止に入っている。

## 需要と供給

夢が実現するかどうかは、その夢に対する社会の需要に大きく依存する。昭和のドロドロが乾きつつあった2000年代後半、生々しい現実を感じさせないPerfumeの近未来的な音楽と世界観は大衆の支持を受けた。つまり、そこには大きな需要があった。

もちろん、供給側であるメンバー3人と関係者の努力と才能と企画力が優れていたことは疑う余地がない。一方、3人組テクノアイドルという「夢」を持っていた私自身は、この夢に向かって何の努力もしていないし、そんなアイデアすら、いつの間にか忘れていた。それでも、そこに大きな需要があれば、いつか誰かが——夢に近い誰かが——実現する。

それを「夢が叶った」と呼べるのかは夢の定義によるが、ここでは広い意味で「将来的に実現して欲しいこと、しかも、簡単ではないこと」を「夢」と考えている。その意味で、過去数十年間は、私にとって他にも多くの夢が叶った。ICT技術の発展と生成AIの台頭により、私が「こんなこといいな、できたらいいな」と思い描いていた技術の多くが現実のものとなった。それらは私一人の夢ではなく、世界中の人の夢が大きな需要を形成して、そこに技術的な供給が追いついてきたと言えるだろう。

時代とともに需要も供給も変わる。そして、大きな需要があれば、供給するものが現れ、その夢はいずれ実現する。一般論に過ぎないが、この「気づき」を得て、私の意識は大きく変化した。それまでの私は、自分の論文の「供給」にこだわり、できることなら、論文だけ書いて、それ以外は何もしない研究者になりたいと思っていた。しかし、大学の内外において、論文を書く以上に求められる仕事は非常に多い。自らが望む供給も大事だが、社会の需要をもっと意識すべきではないか。

私が「お気楽なYouTube検索」をした結果、どんな仕事や活動であれ、そこに大きな需要

があり、それを満たすのに自分が貢献できるのであれば、積極的に関与しようとするようになっていた。この意識改革を経て、私の活動範囲は大幅に広がり、2014年度から4年間続いた所長職も前向きな構想を持って取り組むことができた。

## これからの夢

1980年に私が思い描いた3人組テクノアイドルという夢は、当時は「ないものねだり」でしかなく、恐らく、大衆受けするにはまだ早すぎた。しかし、時代とともに需要も供給も変わる。大きな需要があれば、供給するものが現れ、いずれ実現する。そして、思わぬ形で私の前に現れた。

この体験は私の意識改革につながり、それ以降、夢というほどではないにせよ、いくつかの新しい企画の実現に貢献することもできた。そこに大きな需要があり、自分が供給の一翼を担えると考えたからだ。

ただし、3人組テクノアイドルは日本で実現したものの、それ以外の技術的な夢については、「大きな需要があればいつか叶う」という楽観論は、世界全体を見渡した場合には成り立っても、日本に限れば必ずしも当てはまらない。実際に、需要と供給が既に揃っていても、制度的な理由から日本では実現しないことも少なくない。そうした効率の悪い制度が改善され、制度的なストレスを感じずに済む社会——これが今の私の「ないものねだり」であり、夢ということになるのだろう。